

## 国民生活センター－危害情報における

### 乳幼児事故についての検討 II

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

杉山太幹

要約：国民生活センターによせられた乳幼児の危害情報について検討するとともに、危害情報について若干の追跡調査を実施した。その結果、乳幼児の事故は極めて多種多様ではあるが、発育段階に応じて、また、商品（構築物を含む）の種類によって、危害の態様にいくつかの特徴がみられる。危害発生の頻度のほかに、年齢、傷害の種類、重症度などを総合化した視点からの対策が必要であり、そのために、情報の収集、解析、評価などの実施体制を検討すべきである。

見出し語：国民生活センター－危害情報、商品の安全性、事故防止体制

はじめに：乳幼児にとって最も安全な場所である筈の家庭で、実際には、多くの事故が発生している。すでに第一報で報告したように、国民生活センターでは消費者センターおよび協力病院より危害情報を収集し、1975年度から1989年度までの15年間に、総数55,664件に達し、うち0～6歳児が21.5%(11,948件)を占めている。

乳幼児の事故を全くなくすことは不可能である。そこで、国民生活センターに収集された危害情報をもとに、年齢区分別に頻度、加害商品、重症度などについて検討した。なお、危害頻度の高い商品については、事故時の状況について追跡調査を実施した。

調査結果1)：年齢・性別危害件数(表1)

総数11,948件のうち、協力病院からの情報(以下、単に病院情報)10,552件(88.9%)消費生活センターからの情報(以下、単にセンター情報)1,396件(11.1%)である。年齢別では、両

者とも、1歳児が最も多く、次いで2、3、4歳児と続く。性別については、センター情報では性差を認められないが、病院情報では男に多く、年齢が長ずるにつれて性差も大きい。

2)年齢別・上位加害商品：危害総件数のなかで、上位10種類の加害商品の占める割合をみると、センター情報では、34.4%であるが、病院情報では43.5%に達し、半数近くが上位10商品で占められている。

これら上位商品を年齢別にみると、(図1,2,3)0歳では階段に次いで、煙草が多いのが特徴であり、化粧品、医薬品などとともに誤飲によるものである。魔法瓶も多い。

1～2歳および3～6歳では、階段に次いで自転車が多い。0～6歳を通じて、階段、ドア、風呂場などの家屋内設備、自転車、滑り台、ブランコなどの遊具類、花火を含む玩具類などが目立っている。

3)障害の種類(図4)：圧倒的に多いのは打撲傷で、自転車、階段、ドアなどによるものである。次いで、開放創、熱傷で、開放創は、自

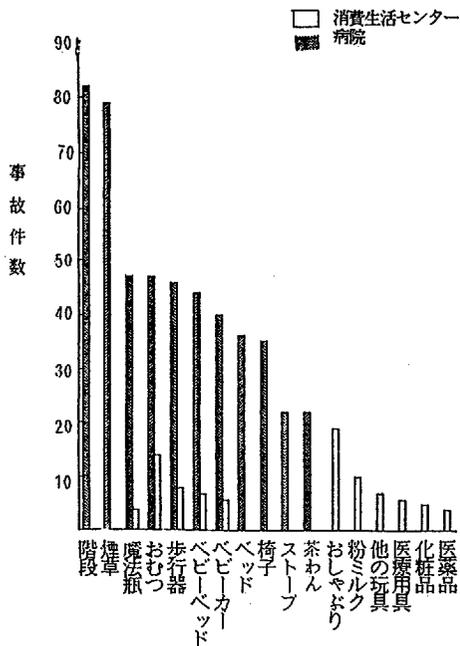
国民生活センター

(Japan Consumer Information Center)

表1 年齢別・性別危害件数

協力 病 院	年齢	計	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
	性別								
	男	6,156	499	1,543	1,132	936	756	677	613
	女	4,388	423	1,147	892	667	530	417	312
	不明	8		4	2	1		1	
	計	10,552	922	2,694	2,026	1,604	1,286	1,095	925
消 費 セ ン タ ー 活 動	男	644	59	186	101	84	81	70	63
	女	638	72	163	107	102	81	65	48
	不明	114	18	47	19	9	7	8	6
	計	1,396	149	396	227	195	169	143	117
	総計	11,948	1,071	3,090	2,253	1,799	1,455	1,238	1,042

図1 0歳児の上位加害商品



自転車、カミソリ、階段によるものが、熱傷は、魔法瓶、ストープ、茶碗によるものが多い。なお、入院治療を必要とした230件について障害の種類をみると、熱傷(57件)、打撲傷(51件)

骨折(46件)などであり、熱傷は、鍋、やかん、風呂、電気アイロン、魔法瓶など、骨折は、自転車、ブランコなどである。

追跡調査：上位加害商品による危害事例について、面接、または通信による追跡調査を実施した。

階段一階段の墜落事故は、すべて降りている時に起こっており、回り階段部付近で転落が始まっているものが多い。構造上の欠陥として、蹴上げ、踏み面の寸法が不揃いであるものがあり、幼児が利用する時に対応できる範囲を超える可能性もある。

採光の位置、手すりの有無、段鼻の滑り易いデザインなども事故発生の要因となっている。2歳の女兒が、二階廊下を三輪車で直進し、階段を転落した事故もある。

階段事故の受傷部位が、頭部、顔面に多いのも乳幼児の特徴である。

自転車—大人用自転車の後部座席に乗った3歳児が、振り向こうと身体をひねった際に、左足がスポークに巻き込まれて、3週間の挫傷を受けた。自転車による事故は、二人乗りによる転倒、荷台または補助椅子からの転落および前輪または後輪スポークに足を巻き込まれる事故が多い。

図 2 1～2歳児の上位加害商品

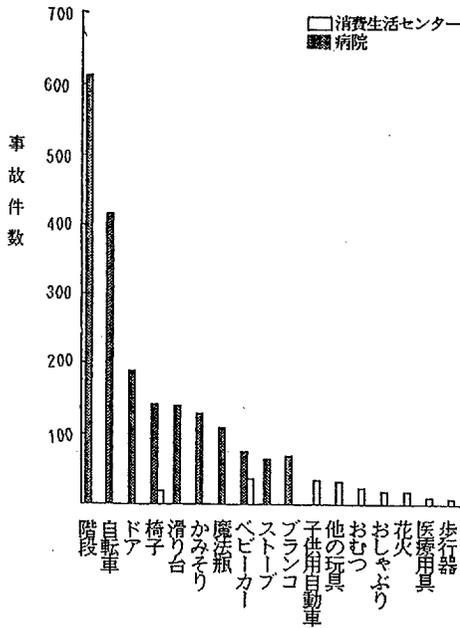
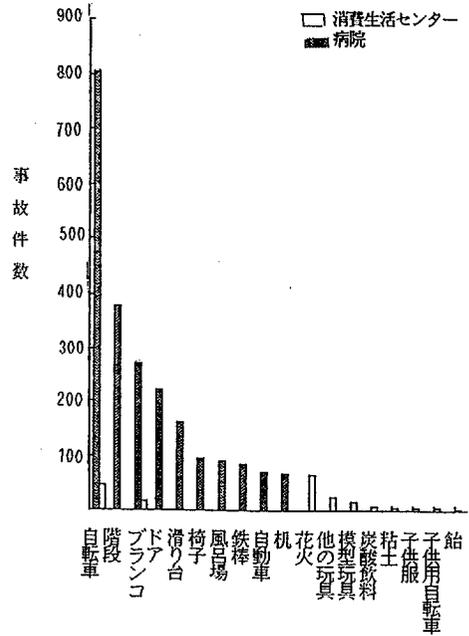


図 3 3～6歳児の上位加害商品



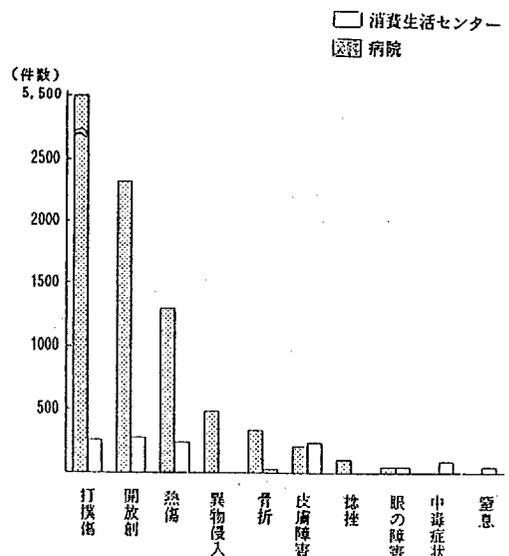
玩具—1歳8カ月の男児が、おもちゃのダンブカーの荷台後部に手をついたとき、荷台後部が跳ね上がって、顔面に受傷した。このおもちゃは、砂場で遊ぶ目的で設計されたものであり、砂場で使っていれば摩擦も大きく、荷台に砂が入れば、このような事故は起こらなかったであろう。設計思想は大人の発想であり、目的外に使用されたことによって生じた事故である。

まとめ：乳幼児の事故は実に様々であるが、事故は1歳～2歳児、とくに男児に多い。加害商品、危害の種類、程度などにも特徴がある。

上位加害商品は、0歳児では、階段からの転落、煙草などの誤飲、魔法瓶などによる熱傷であり、1～2歳児および3～6歳児では階段のほかに、自転車、ドア、ブランコなどである。また、障害の種類は打撲傷、開放創、熱傷が圧倒的に多いが、入院を必要とした事例では熱傷、打撲傷、骨折などによるものである。事故発生の頻度のほかに、危害の重症度、年齢などを総合化し、発育段階に対応した事故防止対策の確立をはかる必要がある。

玩具はもちろん乳幼児の商品は、大人の発想

図 4 障害の種類別件数



だけではなく、乳幼児の遊び、発想の違い、心理、さらに視覚的差異などを考慮し、常に安全第一に設計されるべきである。

国民生活センターの収集している危害情報は、全危害件数のごく一部分にしか過ぎない。乳幼児の事故防止対策をすすめるためには、すでに先進諸国が実施しているように、事故の取集体制を樹立し、収集された資料の分析、評価、ならびに啓発活動を含めての防止対策を実施する一貫したシステムが必要である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:国民生活センターによせられた乳幼児の危害情報について検討するとともに、危害情報について若干の追跡調査を実施した。その結果、乳幼児の事故は極めて多種多様ではあるが、発育段階に応じて、また、商品(構築物を含む)の種類によって、危害の態様にいくつかの特徴がみられる。危害発生の頻度のほかに、年齢、傷害の種類、重症度などを総合化した視点からの対策が必要であり、そのために、情報の収集、解析、評価などの実施体制を検討すべきである。